



{御土居断面}

この石垣がちょうど土塁の横断面（台形）にあたり高さはもう少しあったのではないのでしょうか

西大路御池・お土居探訪

御土居とは豊臣秀吉が戦国で荒れ果てた京都を整備する一環として、外敵に備えての防塁と鴨川の氾濫から町を守る堤防として築いた土塁のことです。工事は天正19年（1591）から京都の町をぐるっと一周する形で始まりました。台形の土塁と堀から成り、総延長22、5キロメートルに及び、東は鴨川、北は鷹ヶ峰、西は紙屋川、南は九条あたりで、その内側は洛中、外側は洛外と呼び、要所は七口開け、出入り口となりました。鞍馬口、丹波口などはその名残です。しかし江戸時代になり次第に無用の存在となり、徐々に取り崩されていき、現在では10ヶ所ほどが部分的にかろうじてその姿をとどめています。その中の一つ、京都市中京区西ノ京原町（西大路御池を東へ一筋北へ100m）に御土居があります。

この場所には、また、市五郎大明神の神社があり、国の史跡に指定されています。この神社、創建の経緯は不明ですが、碑文によると1890年（明治23年）岡崎に住んでいた北村利幾子（きたむらりきこ）なる人物が神託を受けてお土居の上に祠を創建し「市五郎大明神」を祀ったのが始まりとされています。そして1930年（昭和5年）に「市五郎大明神」のあるお土居が国指定の史跡とされ現在に至っています。「市五郎」とはこのお土居に棲んでいた「狸」だったともいい、祠の中には狸の像が祀られています。また境内は伏見稲荷神社のように朱塗り鳥居が連続して並び、参道部分が堀跡といわれています。お土居に作られた土塁そのものが神様になっていることから「土居稲荷」「御土居稲荷」などとも呼ばれ信仰の対象となっているようです。

